

(小村寿太郎侯東京奉賛会講演資料)
小村寿太郎侯と日英同盟

平成30年9月8日
甲斐睦教

1 小村寿太郎侯の略年譜

- 1855年(安政2年) 日南市飫肥で出生
- 1869年(明治2年) 小倉処平に引率され長崎、東京へ遊学
- 1875年(明治8年) 開成学校を卒業し、ハーバード大学法学部へ留学
- 1880年(明治13年) 帰国し、法務省に出仕
- 1884年(明治17年) 外務省に転籍
- 1901年(明治34年) 桂太郎内閣の外務大臣に就任
- 1902年(明治35年) 日英同盟調印、男爵、華族就任
- 1905年(明治38年) 日露戦争後ポーツマス条約調印、2年後伯爵就任
- 1910年(明治43年) 韓国併合
- 1911年(明治44年) 米英独仏と通商条約調印。侯爵、貴族院議員就任後に死去(享年56歳)

2 小村侯の魅力

- (1) 官僚であっても、政治家であっても、国防の信念及び国への献身は一貫している。
- (2) 相手が実力者であろうと、強国であろうと引けを取らない。
- (3) 私心を持たない。
- (4) 会話に上質な洒落を交えて話し、語学も堪能である。 などなど

3 日英同盟の成立

(1) 日英同盟の震源 ロシアの中国における南下に対する脅威

- ① 英国：揚子江流域の商業権益侵害に対する脅威
- ② 日本：日本国防の侵略に対する脅威

(参考) ロシアの南下政策について

不凍港を求めての南下がロシアの重要政策(中央アジアから極東へと変更しそれに伴い1891年からシベリア鉄道を建設。)

(2) 日英接近の契機となった事変

- ① 三国干渉(1895年)のロシアの勧誘に対して英国は不参加。
- ② 英国による威海衛租借(1898年)に対する日本の協力。
- ③ 義和団の乱(1900年)で日本は英国の要請により外国公館保護のため中国に軍隊を派遣。

(3) 交渉開始

- ① 三国干渉後にキンバーレイ英国外務大臣と加藤駐英公使が日英連携の必要性について会談(1895年6月)

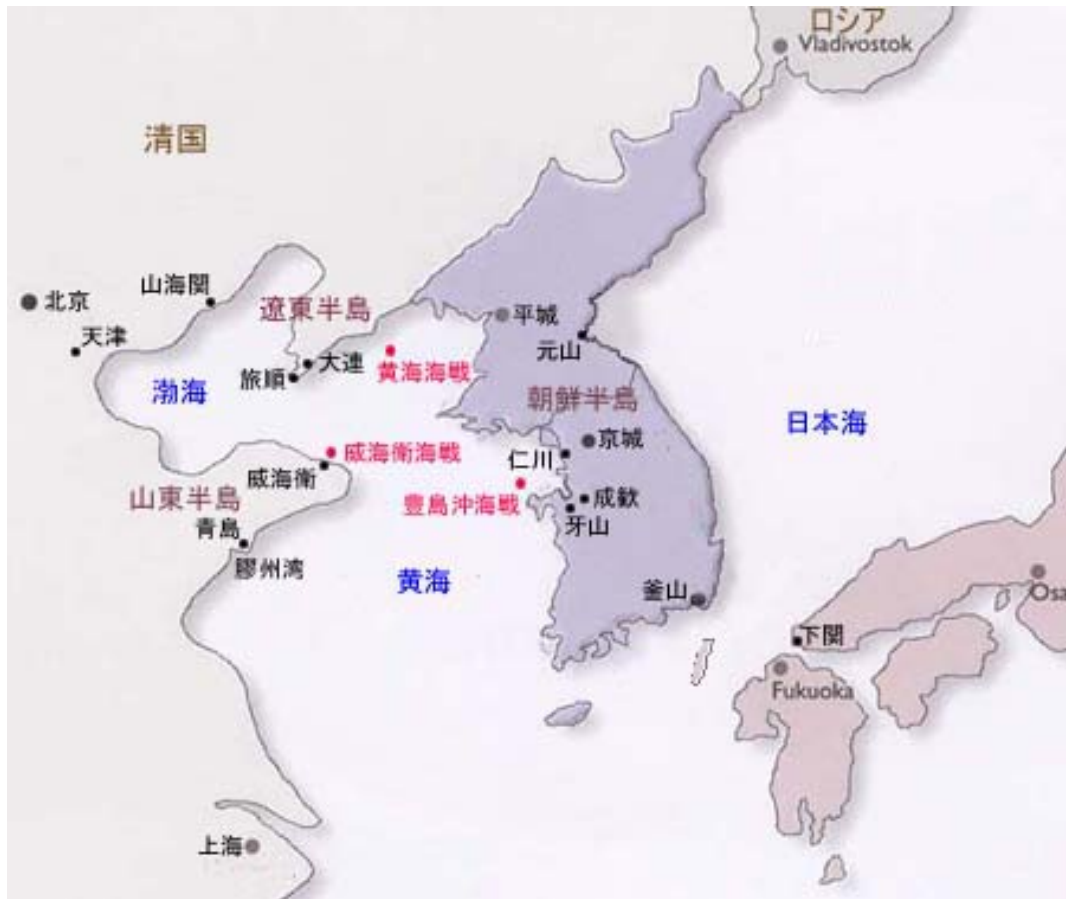
↓ 数年間進展せず(当時日英両政府とも日英同盟に非積極的)

②

内閣や閣僚の交代で両国に同盟の機運高まる

(4) 英国の政策決定過程

- ① 同盟の必要性 ボーア戦争による予算及び軍隊の疲弊(自力低下)
- ② 外交の不成功 ロシアとの外交交渉及びドイツとの連合の不成功。



(5) 日英同盟締結の日本の政策決定過程

1901年6月 桂太郎内閣設立

8月 伊藤博文侯との協議及び元老会議で日英同盟の方針を説明

9月 小村侯外務大臣に就任

【桂内閣の動き】

10月

11月・英国が同盟案を提案

～12月・閣議で修正案決議

・明治天皇に同盟を上奏

・伊藤及び元老達を説得

【伊藤侯の行動】

・エール大学式典出席のため出国

・ロシアに移動し皇帝、財務相、

外務相と面会し協調策を提案、

しかし合意に至らず

1902年1月 日英同盟を英国外務大臣と駐英日本公使により調印

4 小村侯の日英同盟締結における中心的役割

(1) 国際情勢並びにロシアに関する観察力とそれに基づく政策力

・ロシアの南下を止めない行動を予測し、英国との同盟を選択

(2) 論理的な説明能力(明治天皇や元老達に日英同盟を説得)

・元老会議において自ら日英同盟の必要性を説明(1901年12月7日)

(3) 在外日本公館への指示や在日外国公館への対応等の実務能力

5 日英同盟の効果

(1) 日英同盟により日本は1904年の日露戦争で勝利した。

(2) 日英同盟により日本は歴史上初めて非ヨーロッパ圏域から欧米列強社会に仲間入りした。

(3) 第一次世界大戦において、日英同盟により日本は英仏露等の連合側に加わった。また日本赤十字看護士が欧州3か国及び中国に派遣された。

(参考)

1 第二次日英同盟

目的：ロシアの報復を前提として同盟

締結：1905年8月

期間：10年間

経緯：ロシア新外務大臣の、アジアよりも首都から近距離地域を重視の方針転換で日露が接近。

1907年 日露協約締結。日仏協約締結。

これにより日英同盟の存続目的消失。

2 第三次日英同盟

目的：同盟維持を目的に条約更新（一説には日米が太平洋覇権等で対立が深まる中で、日本は英米接近を不安視して同盟更新に積極的）

締結：1911年7月

期間：10年間

終了：1923年ワシントン軍縮条約等で同盟の維持が困難となり同盟解消。

3 第一次世界大戦の日英同盟の影響

(1) 日本軍の中国大陸進出

① ドイツの中国における租借地（青島）を占領

② 中国政府に対華21か条要求を提示

(2) ヨーロッパにおける対策

① イギリスの要請によりドイツのUボート対策のために日本海軍を地中海に派遣。

② 日本赤十字看護士を第一次世界大戦時に英、仏、露、中国に派遣

・派遣決定の経緯

1914年9月8日 陸軍大臣が日本赤十字社小澤副社長に、英、仏、露への看護士派遣を要請

・救護班の編成：医師、看護士、通訳、事務員の構成で20名前後

・活動内容：英国では救護、露仏では病院の開設

・英国での活動（派遣団は医師2名、看護士22名ほか26名で構成）

1915年1月22日・英国リバプールに到着。英国赤十字社関係者多数が出迎え。**特別列車でロンドンに移動。**

・ロンドンでも英国赤十字社会長、駐英日本大使ほか要人多数が出迎え。

・別の歓迎会で英国皇后も臨席(仏、露では無し)

(ネットレイにて)・ロイヤルビクトリア軍事病院（当時欧州最大）

で業務開始(滞在用に日本式湯船も設置)。

・出国時は1915年12月15日にバッキンガム宮殿

に招かれ国王ジョージ五世、メリー皇后に面会

1916年1月24日にイギリス出航

・派遣の根拠

赤十字条例（1901年）及び改正条例（1908年）ほか

第1条 日本赤十字社は救護員を養成し、陸軍大臣、海軍大臣の定むる所によりて、陸海軍の戦時衛生勤務幫助す。（抜粋）

第3条 陸海軍大臣は第1条のために日本赤十字社を監督する。（同）

4 留学概要

(1) 渡航期間 2016年7月25日～2017年8月31日

(2) 留学先 ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)歴史学部修士課程
(MA History, School of Oriental and African Studies,
University of London)

(3) 主要日程 前半：講義受講 後半：修士論文作成